



TITLE:

星ヶ浦命名の由來と滿洲地也名考

AUTHOR(S):

木戸, 忠太郎

CITATION:

木戸, 忠太郎. 星ヶ浦命名の由來と滿洲地也名考. 地球 1925, 3(1): 201-205

ISSUE DATE:

1925-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182800>

RIGHT:

星ヶ浦命名の由來と滿洲地名考

木 戸 忠 太 郎

星ヶ浦は滿洲大連の南海岸の地名で、明治四十二年滿鐵が沙河々口の右岸に開いた遊園に新に付けた名である。北は俗に大連富士と稱せらるゝ臺子山一帯の丘陵で朔風を防ぎ、南は煙波蒼茫遠く祖國と相對して居る。海岸は絶壁直ちに潮に洗はれ、或は沙汀出入して男波女波を送迎し、直線と曲線の美參差として相交り、之れに加ふるに人工を以てし、和洋折衷の庭造り、古雅な海岸ホテルの建物、居心地よき貸別荘など、さすがは滿鐵ならではと思はるゝ設備が遺憾なく施されてある。

星ヶ浦と名付けられたのは略ぼ其遊園としての形を具へた時である。地は素より支那領土内のことでもあり、斯んな日本風の地名が前からあり様筈がない。大連附近に居住する日本人の

慰安場として開かれたからには、同胞が御互に呼び易い名でありたい、何かよい地名はあるまいかと滿鐵重役から私への御相談に、一つ考へて見ませうとお受けしたのが星ヶ浦命名の大序それから色々と首をひねつて見たがどうもこれと云ふよい名稱が胸に浮ばない。其處で滿洲の地圖を擴げて地名の穿鑿に取掛つた、實さへ舉れば名はどうでもよい様なものゝ、名の爲めに實の顯はるゝ場合も多いので、新遊園地の命名にも私は少からず苦心をしたことである。

地名は如何なる場合でも人間がつけたものであるからには、何等かの意義が必ず伴ふべきものである。殊に支那は文字の國だけあつて、自ら其土地の特徴が形容せらるゝことが多く、旅行家や探検家にとりては屢々思ひも寄らぬ手蔓

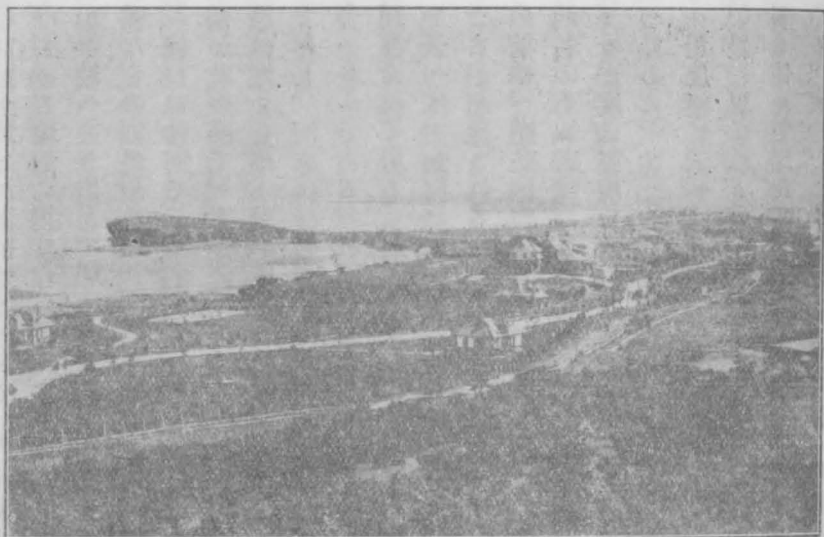
となることがある。奉天、撫順、興京、通化、懷仁、昌圖、安東の如き地名は政治上の意味から命名せられたことは明白で、其多くは都會を成して居る。小都會の地名には海城、熊岳城、析木城に於ける城の字が用ひられ、小部落になると、三十里堡、王家堡子などの堡、九寨、火連寨などの寨の字を用ひた小堡壘の跡、二十里臺の臺の字によりて烽燧臺の所在を示したものとがある。もつと小部落になると、丁家屯、蘇家屯などの屯、魏家店、張家店などの店の字を用ひたものがあり、三家子とか孤家子とか云ふ地名に至つては聞いただけでも其寒村なることが點頭かれるであらう。

摩天嶺、白頭山などは名からして如何にも高い山と云ふ感じを興へる。平頂山は其頂が平く千山や頂岐山の如きは、其群峯簇立の有様が直ちに地名の上に浮んで来る。日本橋の上から見れば大連富士と歌はるゝ山の形も、電車沙河口を過ぎて星ヶ浦に向へば、一變して臺子山の名の空しからざるを覺らしめる。山の頂が平でも

歪んで居ると歪頭山と名づけられ、尖つて居ると果してその名が尖頭山であつたりする。孤立した山の名には大孤山、小孤山などあり、帽子を伏せた様だなど思へば、あれが帽子山と教へられる。

傾斜の極めて緩慢な山には太平嶺、長嶺子などの地名がある。之れに反して急峻な山には煙臺炭坑區内の摩臍山などと云ふのがある。富士山の頂上に近い胸突八町とは僅に二三寸の差である。鴨綠江の上流地方に擦尻過嶺と云ふ峠があるが、この尻と云ふ字は尻の義ださうで、餘り形容し過ぎた嫌がある。寧ろ尻の字は肉體的よりも、讀んで字の如く瓦斯體的に用ひた方が一層適切な地名となるであらう。日本にも甲州に尻見峠と云ふのがあるが、これは上り坂の難所を云ひ現はしたもので、前者の如き下り坂を形容したものと對照して、其處に日支兩國民性の相違を窺ひ得るが如く思はるゝのである。

山地に入ると何々砦子と云ふ地名が多い。之れは其字が現はせる如く、山の一面が絶壁又は



大連郊外星ヶ浦

急傾斜を以て平地に臨んで居る處に用ひられ、其岩石の色が白ければ白石砒子、黄なれば黄石砒子と名づけられ、其地が如何なる岩種より成れるかを豫想し得らるゝ場合が多い。煙臺に近い半砒山と云ふ山は、其名の如く山の半面だけが絶壁をなして居る。山の上に城跡があつてそれが瘤の様に見える處に大疙疸(瘤の義)の部落あり。玄武岩流に蔽はれて山形が城の如く見ゆる處に大豆の産地として有名な北山城子がある。

谷間にある村落の地名に溝又は峪の字を慣用せられ、山の脈が分岐して居る地形を現はすには峪の字を用ひる。岔溝門子二道岔子三岔子などが其例である。山が分岐すれば川筋も自然に岐れるところから、岔路河なる地名もある。三叉路、三股流などの地名もある。支流が幾つも並行して居る場合には、頭道溝、二道溝、三道溝や、四道河子、五道河子など云ふ地名が並ぶことが多い。靠山屯など、云ふ地名も巧に其村の地形を現はした一例である。凹んだ様な地形

には黄土坎とか龍補坎とか云ふ村名がある、坎は凹める地形に用ひられる文字である。山の鼻が平地へ突き出して居る處には大盤嘴子、松樹嘴などの地名がある。

河には沙河と云ふ名が多い。これは滿洲の氣候が乾燥勝で、風が運んで來る土砂の爲めに川筋は埋められ、量の乏しい河水は僅に伏流として存し、河床には殆んど流水を認めない場合が多いからである。石河と云ふ名も同様の意味に用ひられて居る。之れに反して渾河とか遼河とか云へば、如何にも其源遠く、水も豊富であることが想像されるであらう。沼澤地には蛤蟆塘の塘や、蓮花泡の泡の字が用ひられる。是等の地名のある處は、今は乾燥した畑地になつて居ても一度は濕地であつたことを想像し得られるのである。

馬鹿溝と云へば日本では阿呆が住んで居る處の様に思はれるが、滿洲では馬鹿と云ふ野獸が多く住んで居た谷と云ふことが此地名で判斷される。植物では榆樹林子、杉松崗、櫻桃園、韭

菜峪、榛子嶺などの地名は各々其土地に繁茂した樹木によりて石づけられたので、今は開拓されて沃野になつて居ても、其昔密林を以て蔽はれて居たことが想像される。

鑛産物を應用したのには銅鑛嶺、鍍石山、生鐵嶺、金廠屯などが其例である。鐵嶺なども其附近に鐵山か製鐵所が有りさうに見えるが、これには又念入りの由來がある。其昔高麗時代に此地方より銅を採掘して居たことがあつて銅山縣と名づけられ、渤海大氏の世になりて銀山が發見せられ、遼の太祖其地名を銀州と改めたが鐵驪國を併治する様になつてから、其鐵の字を取つて鐵嶺と命名されたのである。探掘金屬の異なるに従ひ其地名の改稱されたのは興味ある事實と謂ふべく、今も猶此地方に銀銅山のあることは其變遷を證據立てゝ居るのである。……

海岸の地名を新しく付けやうとして居るのに筆は何時の間にやら鑛山までも上りつめて居たことを茲に御詫して、さてどう命名してよいものかまだ一向見當がつかぬ。以上述べ來つた様

な命名法に依るとしては餘りに特徴に乏しい感がある。其附近には小平島、河口、沙河、老虎灘など云ふ巧妙な又は適切な地名が海岸に連つて居るので、一層其困難を感じた。それも長くはなかつた。遊園地の西端に一小落があるが、

其名を黒石礁と云ふことを私は直ぐ知つた。村外れの小い岬の端から猶も暗礁が細長く海中へと突き出て居るのが黒く見えるので、斯くは石づけられたのであらう、面白い名だと思ふと、一層のこと此名を襲用するに若かずと考へた。

併し黒石礁では日本人としては如何にも呼びにくく聞きづらい。それに満鐵が新しく開いた處でもあり、どうしても日本的に呼び易い名をと思ひ返しはしたものの、黒石礁と云ふ地名が中々頭を去らない。其中に私はふとこの村名の傳說的由來を聞いた。それは昔の昔天から星が降つたときで、其星が暗礁として今も猶牡蠣などの住所となつて居るのだと云ふ。これは又耳寄りな科學的傳説であるが、其岩質が隕石ならぬ寒武利亞紀石灰岩であることが知れて、矢張架

空の傳説なるに聊か失望はしたものゝ、星ヶ浦と云ふ地名は何の苦もなく直ちに私の胸に浮んで來た。全く天から授つた名であると思は深く感謝したのである。

満鐵でも異議はなかつた。沙河は天の川と改名した。園内には雲井と云ふ井戸が掘られた。小さき祠が建てば織姫稻荷と祀られた *Star Boat* と云ふ名も門札に綴られた。星の家には七夕ならぬ夜毎の逢瀬も重ねられた。星と董の語らひも男波女波の囁きと和洋樂の諧調を失はなかつた。斯くして電車は通じ、自動車道路は開かれ、東洋有数の海岸遊園地となり、星ヶ浦なる地名は遠く海外にも知れ渡るに至つたのは獨り命名者の喜びとする計りではない。これ偏へに天恵の然らしむる處で、其年は餘程星廻りがよかつたことと思はれるのである。